

# 鶏 卵



## ◆飼養動向

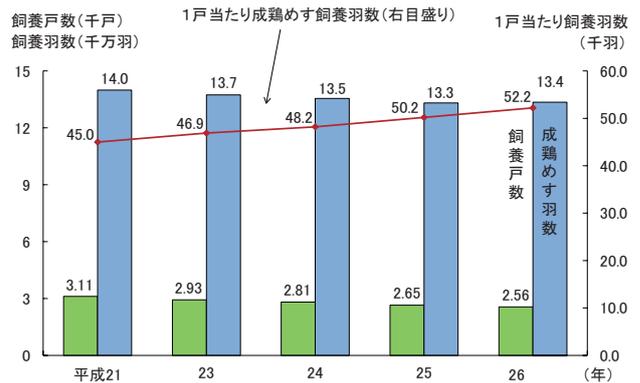
### 26年2月現在の採卵鶏飼養羽数、0.3%増

採卵鶏の飼養戸数は、前年より90戸減少し、平成26年は2560戸（前年比3.4%減）となった。成鶏めす飼養羽数の規模別に見ると、5万～9万9999羽の階層において増加したものの、それ以外の階層では減少した。

また、成鶏めす飼養羽数は、1億3351万羽（同0.3%増）とわずかに増加した。飼養規模別に見ると、成鶏めす飼養羽数が5万～9万9999羽および10万羽以上の階層において増加した一方、それ以外の中小規模の階層においては減少した。

この結果、1戸当たりの平均成鶏めす飼養羽数は5万2200羽（同4.0%増）とやや増加し、依然として大規模化が進んでいる（図1）。

図1 採卵鶏の飼養戸数および成鶏めす羽数



資料：農林水産省「畜産統計」

注1：数値は各年2月1日現在。

2：成鶏めすとは種鶏を除く6カ月以上のめすをいう。

3：飼養戸数は、種鶏およびひな（6カ月未満）のみの飼養者および成鶏めす羽数1千羽未満の飼養者を除く。

4：平成22年および27年は世界農林業センサスの調査年のためデータなし。

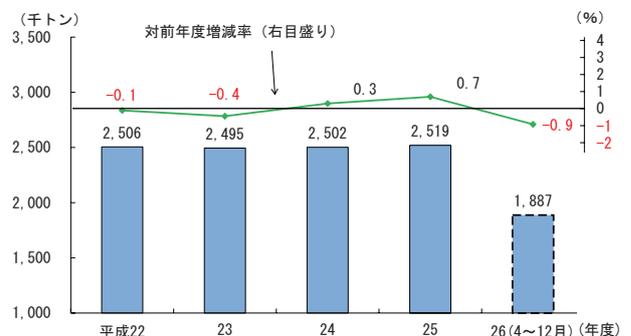
## ◆生産

### 26年度の生産量、0.9%減

鶏卵生産量は、平成23年度まではひなえ付け羽数の減少などから減少傾向で推移してきたが、24年度には、減少に歯止めがかかり、25年度は、鶏卵卸売価格が好調に推移し、ひなえ付け羽数が増加したことから、251万9000トン（前年度比0.7%増）とわずかに増加した。

しかし、26年度（4月～12月）は、前年度に生産量が増加した反動もあり、188万7000トン（前年同期比0.9%減）とわずかに減少した（図2）。

図2 鶏卵の生産量



資料：農林水産省「鶏卵流通統計」

注：27年1月以降のデータは未公表。

## ◆輸 入

### 26年度の輸入量、3.7%増

鶏卵の輸入量（殻付き換算ベース）は、国内需要量の3～5%程度を占めており、そのうちの約9割は加工原料用の粉卵である。

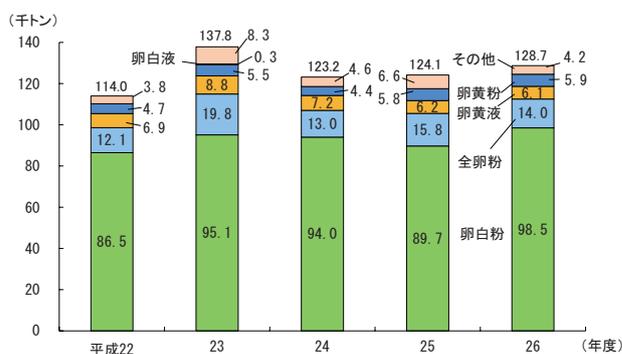
平成24年度は、前年度が、東日本大震災後の影響による国産品不足に対応するため、加工メーカーなどが輸入品による手当てを行い高水準であったため、その反動から、12万3200トン（前年度比10.6%減）と、かなりの程度減少した。

25年度は、震災発生以降に定着した加工・業務用の需要もあり、前年度並みの12万4100トン（同0.8%増）と、引き続き震災前（22年度）の実績を上回った。

26年度は、国内卸売価格が高水準で推移したことを受けて、需要者が輸入量を増やしたことなどにより12万8700トン（同3.7%増）と、やや増加した（図3）。

なお、26年度の主な輸入相手国は、イタリア、オランダ、米国であった。

図3 鶏卵の輸入量



資料：財務省「貿易統計」

注：殻付き換算ベース。

## ◆消 費

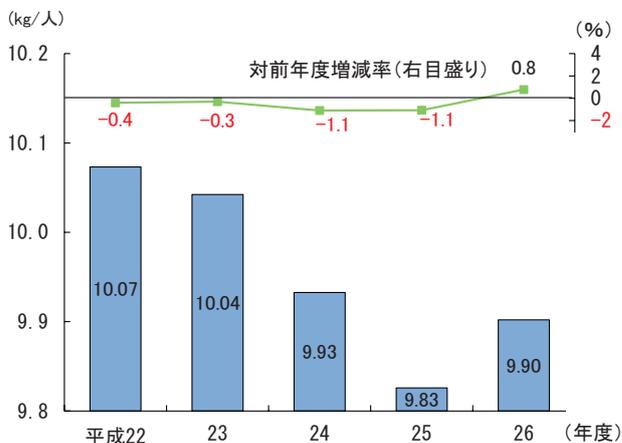
### 26年度の1人当たり家計消費量、0.8%増

家計消費量は、卸売価格が上昇したことなどにより減少傾向となり平成24年度には年間1人当たり9.93キログラム（前年度比1.1%減）と10キログラムを割り込んだ。

25年度も、卸売価格が上昇したことに加え、猛暑により家庭で火を使った料理が敬遠されたことなどにより、4年連続の減少となる同9.83キログラム（同1.1%減）となった。

26年度は、前年と比較して、夏場の気温が高い期間が短く、消費の落ち込みが少なかった影響もあり、同9.90キログラム（同0.8%増）と5年ぶりに増加となった（図4）。

図4 鶏卵の家計消費量（年間1人当たり）



資料：総務省「家計調査報告」

## ◆卸売価格

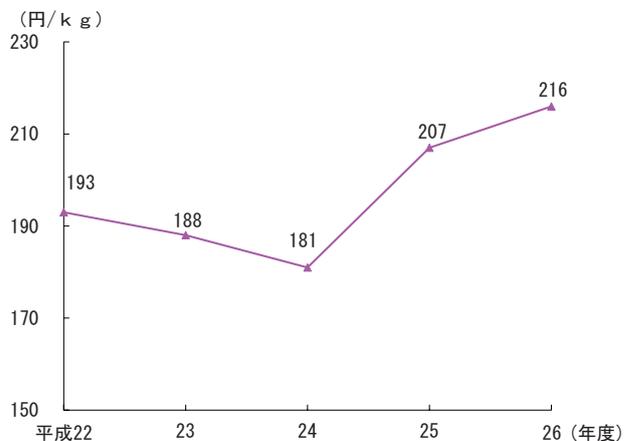
## 26年度の卸売価格、9円高の1キログラム当たり216円

鶏卵卸売価格（東京全農系M）は、平成23年度、24年度と前年度を下回って推移した。

25年度は、生産面では夏場の猛暑の影響により卵重および産卵率の低下がみられたこと、需要面ではコンビニエンスストアのデザート需要が増加したことなどにより、下半期に相場が上昇したため、前年度をかなり大きく上回る1キログラム当たり207円（前年度比14.4%高）と、平成16年度以来9年ぶりに200円台を記録した。

26年度は、生産量が減少する一方で、前年度に引き続き加工・業務用を中心に需要が堅調だったことから、同216円（同4.3%高）と2年連続で200円台を記録した（図5）。

図5 鶏卵の卸売価格（東京全農系M）



資料：JA全農たまご株式会社「月別鶏卵相場」

注：消費税を含まない。